





香具屋助高助

丹波屋吉三郎
尾上吉賀之丞



吉原助三郎
市川姉藏

吉原良兵衛
中村翫雀

の單物壹本さゝりて出て來り此体を見て助三郎様じやあり开ぬうと文藏角助いろいろ
詫をする兩人聞入れずむたいよつれて行かんとするもへ是をさ、ゆる兩人刀をぬいて切
つて懸る是よて彌兵衛兩人を打ちこらそのなきづして下も手へ逃げては入る彌兵衛こな
し有て行うとする此時丑松出て彌兵衛までと聲をかき八郎兵衛が義理で助三郎の片をも
ちやアかれも侍が尻をもち一番出入りをまにやアならねへといきれくこなたもにつこり
笑ひこつちで事いこのまぬぐうられた喧嘩ならかわにやアならねへるふ性根がすきつた
ら今の侍どの譯が違ふ丑松さまのおま足にやア骨があるぞよその筋骨もまぢんにくだき
新地の端の水ぐつと心辰已か當の岡をふで出入りをするから命を突出す八幡鐘相手の
さらぬサアこれ丑松何にちよこ才など唄入りの鳴物にて立廻り爰へ八郎兵衛出て來り
又持前の喧嘩をするかと彌兵衛に異見する是から往來で人にた、あれふまきても決て喧
嘩のせぬといふもへ八郎兵衛も案心して兩人連立行かんとする丑松起上りら又と組付彌
兵衛ふりやどいて見事に投げるを木のかしら幕

二幕目仲町岩田屋の揚舞臺上手中貳階正面長のしれんいつもの所門と口爰に文藏上手に

住び此傍に角助藝者吉野の茶屋女酌をーているたいの持の丸八カッポレを踊つて居る賑
やかに幕明く爰へ箱廻し出て若野の今日早出にて船へ参り舩たと是を聞文藏ふ興ある体
にて是から奥の貳階へ参りうまさ玉子のあむれ喰ひと此人數皆々奥へは入る向ふ前幕
の助三郎若野をつれ出る跡よりまたち子付添花路にてせりふ有つてまたち子を返し兩人
舞臺來るおまげさん内へと是にておまき出てサア一口ねわかり成せと酒盛に成り向ふ
か丹波やをつま使の形りおとめに風呂敷包をもちたせ出て來り花道よくせりふ有つて舞
臺へ來り内に入り酒に酔たるこなしにてみまくとせりふはたてつ此人數奥へは入る向
ふか小井筒太吉吉光の刀を風呂敷に包み是を持出て來り八郎兵衛さんにあいたいと云せ
りふ有つて内に入り茶屋女案内して奥へは入る向ふか丑松うぼろの着付にて蕎麥のうら
をくひ乍出て來り此跡より蕎麥屋の若者付て來り勘定としてくれるといふ錢がふゆら
ある時拂う云とゆふてくさのせりふ有て蕎麥屋のあきれて返しては入る丑松の門口の
掛灯燈を見て岩田屋爰だとうあづき足にて門口をわたりサア御容様がござつたぞと是に
てお繁茶屋女まゝく出て來り是を見てひつくしてさよと御肴も皆賣切れて何んにもな

いへ返てくれろと断る香具や彌兵衛もわいたといつて奥へ入る喚なり向ふ彌兵衛好みの巻物豈本ざしまち子兩人たもとにすがり出て来り何やらこふてくれと彌兵衛よねたるせりふ有ッて舞臺へ来り内より彌兵衛さんよふごんしたとこなせりふきつて奥へは入る彌兵衛壹人り残り居る所へいせんの丑松酒に酔一こな一よて出て来り富ヶ岡での仕返一お來といふせりふ彌兵衛ハ八郎兵衛が異見よ付喧嘩のせぬからぞんぶんよ一ろといふせりふ丑松こあ一有ッてあふばうきよぶちまだ一こんあ事トやふ丁箇なりねへとくし持ちし出刃ばう丁を出し切ッて掛るもへよきあく立廻り丑松をうちこらしお繁よ脇差をもつてこいといふ此時奥よまかつま走と出て来り彌兵衛をどめて丑松に異見する丑松も是のら堅氣になるから元手をかせとあつまがさしているかんざしをぬきとりせりふ有ッて向へは入る爰へ文藏若野を遣ッのり出て来りせりふ是を彌兵衛あつらい奥へ入る向方仲間てうちんを持先よ此跡か矢鳥才兵衛袴羽織大小よて出て来り此時八郎兵衛いそき足よて出て才兵衛に行わひ雨降よ成りまばし此内よて雨舎りと才兵衛を伴ひ岩田屋の内よ入る此時若野茶を吸よ才兵衛に出し何心なく顔を見合胸くりあ

ふのちの是よて若野中貳階へ走りは入る是か才兵衛國元の大變吉光の刀ふんしつこの件を八郎兵衛にうさる八郎兵衛ハ右吉光の刀ハ心當もござり舛れば夜半迄ハ急度手に入れ持参いよしまととうけわひ戈兵衛ハ向ふへは入る中貳階より若野出て来り死ふとするもへ八郎兵衛どめる又奥より助三郎おつま出て助三郎死ふよとるおつまとめる奥より太吉出て吉光の刀を五十兩受取八郎兵衛にわさし助三郎改めて相違ないといふ八郎兵衛件の刀を助三郎よあつり若野の身受金の工面をかつまにたのむ急度こしらへるから案事るさといふもへ八郎兵衛も案心しまりし金づくわしも心當りもわれハ工面をしよふとせりふ有て向ふへは入る跡若野助三郎残りいろくせりふ有る爰へ文藏伺ひ出て傍よある光の刀をとりりへ思入有ッて奥へは入る兩人是をさす少しもはやく此刀戈兵衛さまへと助三郎刀を持早足よ向ふへは入る爰へ前まくの奥平次出て来り彌兵衛よあいて八郎兵衛とおつまが中を縁を切ッてくれとこのむせりふ彌兵衛も尤とこどくしんして年寄がわざくと男と見込てたのむとあきハ是迄なきぬ敵役よくまれるのも合点で二人りが縁を切ッてやらふといふもの、二人りが中忠義の爲といひ、あがらあま木をさくも浮世

の義理と云ふりせりふ有ッて幕

三幕目丹波屋の場一面の平舞臺上手壹間の障子家体正面のれん口上手豚弄棚鼠壁の腰張りいつモの所家根付の格子戸軒の神燈をともしさうし升中窓の見切り此前へ用水桶都て藝者屋の体よろしく飾付爰また子小菊居眠りをして此体は箱回し藤七立懸りしか見得端唄にて幕明く藤七居眠りをして小菊をまぐる是にて小菊與へは入る爰へ九八出て來まをつまよあいたいといふおつまつ待のねて與より出て來りお客先の金の無心の出來たのと聞く今と云ては出來にくい皆斷で座り升といふゆへおつまつまよあしたよからふと思案の思入此上の旦那にのんで年季をまじし一生藝者のつとめをしても八郎兵衛さんの爲わが身の上よりへられぬと與へ入る向ふは八郎兵衛橋懸が助三郎出て來りわしのどうのんがへても戈兵衛さまのやのあわされぬゆへ此刀のわが身の手うらわさしてくれろとたのミ又若野の身受の事夜半迄は金が出来ぬその時ハきしや生ていふれぬ程に死んで仕舞ふぞや急度お受合申升ると此せりふ有て助三郎の別れる八郎兵衛の内に入りおつまつに金事ハどうとやと聞ておつまつモウ出來てある程に案心まさんせといふ

ゆへ八郎兵衛よろこび刀をのつて向ふへは入るおつまつ思入有てせめてまばしの間でも案心させよふばつおりにいつかりをいふたれを親方さんはたのんだ金もとのとす夜半といふてもモウとづか何んとしたよからふとあげく思入此いせんより彌兵衛門口に伺ひいて此時その金おれが貸てやらふと内へは入る是より八郎兵衛と縁を切りお主の爲二ツにハ産の親與平二どのおかれへのたのミとせりふおつまつも八郎兵衛さんの爲あらハ縁を切りあいつづのーといきうといふゆへそらした上の手詰めの金急度やるぞよと中貳階へは入るおつまつ手酌にて酒を呑ム爰へ八郎兵衛出て來りおつまつに金の事をいふおつまつあいつづかーを云ゆへ八郎兵衛聞き込とその男と云ハと此時彌兵衛外でもねへおれだど中貳階が出て來りせりふきたつて八郎兵衛モウ是迄とおつまつを切らんとする所へ若野走り出でいろく留る八郎兵衛ハ無念のこなしにて此世のおろの未來まで貳度とつづを見るものかと若野をつれてこゝ有て向ふへハ入る跡にておつまつやくの起り思入彌兵衛かいやうして此道具廻ハ舞臺正面響かした町家遠見風ハ音にて道具納る直に唄上るりに成り八郎兵衛額冠り壹本どしにて出て來りたひがに心を打わかし未來までもといふ中も

打ッてかひつた今のしきまゝで藝者れつとめれ身たれみよくなき世に成行と思案れこあし此道具をせせなしに回ス

ふたい向ふ一面の棟塀上手は家根付の門都て深川靈岸裏門の休爰へ上手より丑松先に請入文藏角助惣兵衛出て來り是より四ツ手駕をつらせ出て何んどむこくいつたトヤアねへるとせりふれたつてとあゝ行くにかゝる此時八郎にへ出て若野の身受をこつちへさしてくれろとたのむ是よりせりふ有ッてト、八郎兵衛をとらへ打そすへるをあゝこあし有り向ふへは入る八郎兵衛無念の思入爰へいせんの戈兵衛出て來り刀れさいそくせる最早手に入り升た御覽被下きとさし出ス戈兵衛改め見てこりや偽せ物といふゆへ八郎兵衛胸くり戈兵衛役目の鑑格此上の身どもが切腹あして殿さねへや譯不忠不義ある大たわなめと向ふへは入るそんあゝこりやア偽ものであつたか身受の金のつるの切れ刀のよせものこりや何んとあゝよのらふよつとあり此時本鉤がね八郎兵衛思入有テアリア入江町の初夜のうね助三郎さまの命のせつば斯ういふ事に成行もおつほめにだまされさか此身のあやまりトこあし是を又あゝせあしに廻さふたい元の丹波屋の道具に戻る向ふより八郎

郎衛覺期極めしこあしにて出て來り門ト口へ忍びよるおつよの文みをかいてるよき程に内より入るお妻見て八郎兵衛さんおん又といふあゝ、又切り付る兩人立廻り有てとくめをさし此とき奥より彌兵衛出て來り此体を見て胸くり彌兵衛めら又と切り付るを落ちるかつまが書置を突付々此見跡よて淺黄やくをふり冠せ切ッて落ス元の裏門の道具爰へ早桶をのつとき家主付て出て來りお長家の衆あゝきに此苦勞でござい升とせりふわたつて塀の上へ狐出る是にて早桶われて中より亡者出るをなくれどろ死とつといふて下モ手へは入る爰へ所化壹人出て來り惡魔たいさんといのる事亡者の中へ經文の大きらい芝居が好きトやといふもへあらしとのせりふ有ッて此道具引てとるふたい靈岸墓所の道具に成り向ふより八郎兵衛出て來り彌兵衛めを取まがしふがざんねんといふせりふ有りて腹を切らふととるおつまが書置ふところより出る是を見てふきにトドリこあしふと上書目をつけ書殘そ一書の事とよきくさきもへ上手の高さうらうをとら此書置をよき終りこあし有ておつま了簡してくれをちばのり殺しひせぬととらを切ふんととる所へいせんの戈兵衛文藏は繩をかゝ出て來り二字吉光の刀手に入ッる上の死るに及ぬは寶出る上のふい

里見古手や兩家の納る目出さしく幕

大切上るり鶴歳龜齡榮久松舞臺正面より上へよせてふりよき松の大樹是へ金の注進繩
をりけ此根元へ鉄のやうい日覆より松の鉤枝正面紅白の段をく下モの方太夫座一ッせり
よて幕明く頭取ふれ有て太夫座の段をく切ッて落ス宮本連中居並び上るり文勾につれて
向ふよりのちんの素袍好きの形り弓と矢を持先について兩人同トく拵らへ此跡より右
の形りにて太刀を持四人出てふり有ッて納る爰へ白ねりの仕丁兩人柄長さうざし團扇を
さしおと出る世跡を奏の始皇よふらく付の玉冠ぬひもやうの装束に上出て來り此跡よ
り半素袍兩人次に金紋紗のより衣緋のふり袖金えぼし鳥臺を持兩人此跡へ相中の仕丁大
せむ付添出て花道にてふり有りふさういへ來り久松座開業の口上有ッてうしろの段幕切ッ
て落ス長唄はやし連中居並び下座をどつてささくふり有ッつて納るどろくに成り此
人數引抜向ふ一面隅田川土手の景色都鳥流しの遠見涼を船所々に有り後に花火の上る仕
るり宮本の上るりにて賑やかまをさくふり有ッてあらしに成り段切よろしく先ッ筋書
双紙も此狂言の是さりと目出度賣出しのたいことんくと御評判く

日本橋區本石町四丁目五番地

編集者

山田常次郎

本郷區湯嶋壹丁目拾八番地

出版人

齋藤長吉

明治十二年九月三日御届

價金貳圓

